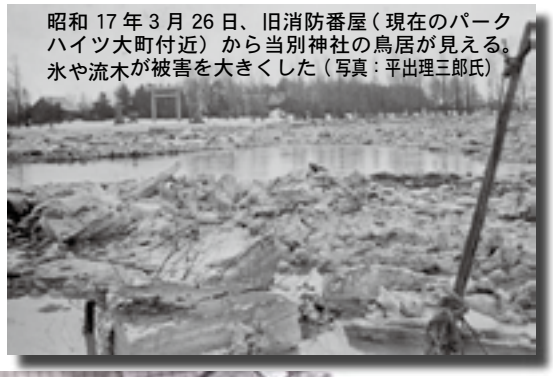
当別町 140 年特別企画
第４話 川と治水の今昔物語

石狩川新水路掘
新型の土木機械
昭和初期（エキ

①壮絶な水害との戦い

当別の地は水量豊かな当別川のおかげで、実り多い肥沃な土壌の反面、毎年のように繰り返される洪水により、その収穫のほとんどを失う闘いの連続でした。

開拓間もない明治 31 年の水害はビトエ、東裏方面の被害が大きく、流域一帯は大海のような状況で、240 戸の住民は屋根に上がって、救助を待ちました。昭和 17 年の水害は融雪洪水で、当別川の氷が溶け出し、この流氷が金沢の国鉄鉄橋に詰まったことから川水が溢れ出し、勝円寺付近からパンケチュベシナイ川を溢れさせ本町市街地のほとんどの家屋が浸水の被害を受けました。昭和 37 年の融雪洪水では、自衛隊の出動を要請し、張りつめた氷の爆破まで計画されました。（長距離の爆破になるため実現しなかった。）昭和 56 年 8 月には観測史上例のない大雨が２度にわたって北海道を襲い、農地を中心に大きな被害をもたらしました。



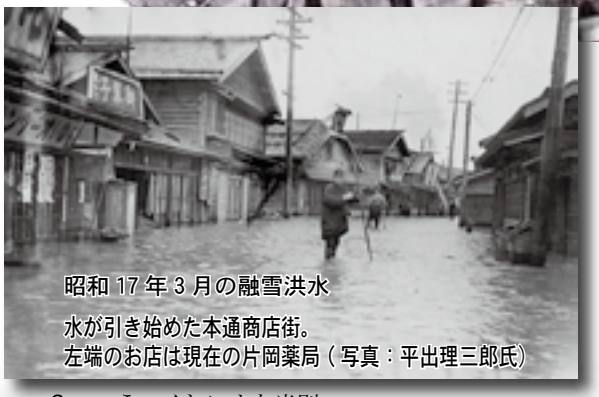
昭和 17 年 3 月 26 日、旧消防番屋（現在のパークハイツ大町付近）から当別神社の鳥居が見える。氷や流木が被害を大きくした（写真：平出理三郎氏）

改修前の当別川（昭和 23 年 6 月極東米軍撮影）

蛇行の著しい自然河川

幾多の水害を教訓に川のショートカットは石狩川から始まった。

市街地間近で大きく蛇行し、その中州には一時期中学校や競馬場があった。



昭和 17 年 3 月の融雪洪水
水が引き始めた本通商店街。
左端のお店は現在の片岡薬局（写真：平出理三郎氏）

本町での特に被害の大きかった水害

年　月	種　類	家屋の被害	農地の浸水
M31.9	豪雨	流失 75 棟、浸水 441 戸	3,000ha
M37.7	豪雨	流失 35 棟、浸水 1,370 戸	4,500ha
S17.3	降雨と融雪	詳細不明	詳細不明
S36.7	豪雨	流失 3 棟、浸水 1,150 戸	2,600ha
S56.8	台風 12・15 号	浸水 544 戸	7,400ha

掘削には
械が投入された
キスカベーター）

②大規模な石狩川治水

度重なる洪水は、北海道開拓の大きな妨げになると、国では石狩川治水費として653万円（現在のお金で約82億円）を計上、石狩川河口から江別に至る33kmの改修が明治43年から着工されました。石狩川治水事務所長に就任した岡崎文吉氏は、当初は持論の放水路方式で行う予定でしたが、大正6年からは蛇行部をショートカットする捷水路（近道）方式に改められ、その後の各河川や支流の治水もこの工法が用いられるようになります。生振、ビトエ、当別太の屈曲箇所の切替えは掘削機械、浚渫船を導入し、昭和8年に通水。現在、札幌大橋から見える直線化された石狩川はこの時の工事の成果です。また、石狩川からの逆流氾濫の防止のため、当別川の築堤もほぼ同時に進み、昭和11年に本町市街地までの堤防が完成しました。石狩川の改修は昭和44年の砂川捷水路まで半世紀以上にわたったのです。

現在の当別川（平成19年8月の航空写真）

■参考文献
当別町史（1972年）
当別太のあゆみ
（1982年）
石狩川治水史
（北海道開発局HP）
■情報課広報広聴係
☎23－3069

③泥炭地開発の巨大プロジェクト

石狩川の捷水路工法による改修は、流下能力が高まり洪水の抑制に加え、水位が低下したことによる泥炭地の開発が進みます。本町と江別市、月形町、新篠津村にまたがる広大な篠津原野を優良な農地にするには篠津運河の開削が必要でした。戦後の食糧難の中、来日した世界銀行の農業調査団は、石狩川流域泥炭地の開発が日本中で最も有望な農地開発と結論し、石狩川流域総合開発事業は世界銀行からの融資を受けることとなりました。軟弱な泥炭地という最悪な条件の中で用水路と排水路の築造、客土、道路橋梁の建設は困難な工事の連続でした。さらに当別川の上流に青山ダムを建設して農業用水を確保、網の目のように水路を張り巡らし、昭和44年に石狩川右岸の不毛の泥炭地が1万1千ヘクタールの水田に生まれ変わりました。

④その後の治水と５６水害

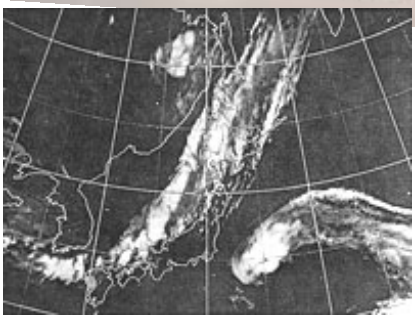
このように治水と農地の開発は幾多の困難を乗り越えて進められ、当別町の南西部は緑豊かな水田地帯に変わり、水害の脅威も遠ざかったように思われました。

ところが昭和56年の夏、観測史上最大の豪雨が北海道を襲ったのです。８月３日～６日にかけて本道に停滞した日本海低気圧は、本町平野部で308ミリ、青山ダムで563ミリ、札幌で294ミリ、岩見沢で406ミリという雨を降らせ、特に石狩川下流の篠津堤防、幌向川をはじめ60ヶ所で堤防が決壊。江別市、岩見沢市、北村などで溢れた水が田畑を押し流し、被害家屋は北海道全体で２万２千５百戸にのぼりました。

本町では下流の川下、ビトエ、獅子内、当別太の各地区で浸水被害が大きく、一面のかっ色の湖と化しました。公民館に避難した人は317名、被害の総額は45億円と当時の広報は伝えています。このような災害が繰り返される度に安全基準を引き上げ、防災工事などの備えを強化してきましたが、自然の脅威に対してはこれで万全という基準はなく、洪水調節などを目的とするダムの建設など、総合的な治水対策はこれからも必要とされています。

記録的な被害を伝える昭和56年の広報９月号

集中豪雨当別をおそう
無情の308ミリ
家屋の浸水339棟に
石狩川水位9メートル越える
災害記録から



昭和56年８月４日８時の気象衛星「ひまわり」の映像。
降り続く雨は洪水の序章だった。

インタビュー

全面転作した年に大水害

川下左岸　鈴木助信さん（当時40歳）

昭和56年８月６日の鈴木さん宅

当時、雨はほとんど止んでいたのに、犬がよく吠えているので外を見たら水がどんどん上がってきてる。この辺りは篠津の大排水からの越流した水が溜まってくるので、川下会館に避難するよう役場から職員が来て、そこで２晩泊まりました。お年寄りの中には「昔の水害はもっと凄かった」と言って避難しない人もいましたがね。

悲しかったのは、近所の仲間（当時39歳）がトラクターごと排水に落ちて亡くなったことです。探しようにも一面の泥水で、当時の排水路は幅も深さも大きく、役場から来たグレーダーにワイヤーをかけ、網にかかるようにして探したのです。私はその頃、農地を買い足し、畑全面に小豆を蒔いて、いよいよ収穫というその時期に畑は水浸し、さらに２週間後にも追い討ちをかける雨が降り、結果は全滅でした。300俵ほどの収穫を見込んでいたので、おそらく1800万円位の大損害です。そんな訳でせっかく買った畑も売りに出さざるを得なかったのです。

農家にとって水害は地震や火事より恐ろしいものなんです。